

農業技術情報

令和5年6月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の遅速(6月15日現在) ()内は平年値 移植てん菜のみ3町平年値の平均

作物名	遅速 日数	生育状況		農作業状況
秋まき小麦	+2	草丈 78.4 (77.4) cm 茎数 629 (737) 本/m ²	出穂期 6/ 2 (6/ 5) 出穂揃 6/ 6 (6/ 8)	
ばれいしょ	+2	茎長 24.0 (19.4) cm 茎数 4.4 (3.6) 本	着蕾期 6/12 (6/14)	
大豆	+2	茎長 13.1 (9.4) cm 葉数 2.2 (1.0) 枚	出芽期 5/30 (5/29)	は種期 5/15 (5/16) は種終 5/17 (5/18)
小豆	+2	茎長 3.7 (3.4) 葉数 0.6 (0.4)	出芽期 6/ 2 (6/ 4)	は種期 5/20 (5/21) は種終 5/24 (5/25)
菜豆(金時)	+2	茎長 6.6 (6.2) 葉数 0.6 (0.3)	出芽始 6/ 4 (6/ 6) 出芽期 6/ 6 (6/ 8)	は種期 5/26 (5/28) は種終 6/ 3 (6/ 3)
菜豆(手亡)	+2	茎長 5.2 (4.9) 葉数 1.4 (0.5)	出芽始 6/ 1 (6/ 3) 出芽期 6/ 2 (6/ 4)	は種期 5/24 (5/24) は種終 5/30 (5/30)
てん菜(移植)	-	草丈 28.8 (28.7) cm 葉数 12.4 (14.7) 枚		
てん菜(直播)	+4	草丈 27.1 (17.5) cm 葉数 12.8 (10.3) 枚		
牧草	+1	草丈 100.5 (94.6) cm	出穂期 6/12 (6/13)	収穫始 6/12 (6/13)
サイレージ用 とうもろこし	+1	草丈 32.6 (32.1) cm 出葉数 5.8 (5.7) 枚	出芽期 5/24 (5/25)	は種期 5/15 (5/15) は種終 5/20 (5/23)
たまねぎ	+3	草丈 35.2 (25.2) cm 生葉数 4.3 (3.4) 枚 葉鞘径 7.6 (6.2) mm		

畑作

<秋まき小麦>

1 赤かび病の防除

秋まき小麦では場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、2回目以降の防除を実施してください。

表1 赤かび病の防除体系

回数	農薬名	使用倍率	DON 低減効果	対ニバーレ 防除効果	赤さび病
2回目	ベフトップジンFL	800~1,000倍	●	●	
	または ミラビスFL	1,500倍	●	●	○
3回目	シルバキュアFL	2,000倍	●		●
臨機	チルト乳剤25	1,000~2,000倍	●		○/●

●道指導参考あり ○登録あり指導参考なし

※バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム（物理性の問題のため）

※DMI剤（RACコード：3）は、周辺作物に薬害が生じる可能性があるため飛散に注意する。

※農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。「RACコード」が同じであれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

2赤さび病の防除

ほ場を確認して、発生が確認された場合は臨機防除で対応しましょう

表2 赤さび病の防除体系

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期	回数（以内）
ミリオネアフロアブル	4,000~8,000	収穫7日前	2回

※ミリオネアフロアブルを使用した場合、ミラビスフロアブルは同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

3アブラムシ類、ムギクロハモグリバエの防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。エルサン乳剤での同時防除が可能です。

【アブラムシの要防除水準】

出穂10日後頃、7~11頭寄生した穂がほ場全体で45%以上で防除を実施する

【ムギクロハモグリバエの要防除水準】

- ・6月下旬に50茎の上位2葉を確認
- ・葉面積の約1/2以上の被害茎数割合が16%を超えていれば防除を実施する

表3 アシグロハモグリバエの防除体系

農薬名	使用倍率	ムギクロ ハモグリバエ	ムギキ モグリバエ	アブラムシ類	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
エルサン乳剤	1,000	●	●	●	7日	4

4葉面散布による窒素追肥について

適正タンパク値の確保や粒重の増加を目的として窒素の葉面散布を行う場合、「尿素使用の場合は1.0～1.5%液を3回（窒素成分で1回0.5～0.7kg/10a）」で検討してください。

注意事項

- 過去にタンパクが高かったほ場では、葉面散布の要否を検討しましょう。
地力が高い・前作による窒素のあと効きが予想される場合は実施を控えましょう
- 尿素の散布濃度は1.5%以下としましょう。
高温時の葉面散布は葉やけの原因となるため、高温時の散布を避ける、尿素濃度を下げる（濃度1%以下）などの対応が必要です（尿素単独の場合）。
- 尿素の葉面散布と防除を同時に行う場合は、葉害の発生を助長するので、尿素濃度を1%以下にし、展着剤の使用を避けてください。

5小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

十勝では発生が確認されていませんが、注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥貯蔵施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。感染している場合、乳熟期までには外観から症状が確認できるようになりますので、図を参考に万が一疑わしい株を発見したら、JA または普及センターにお知らせください。

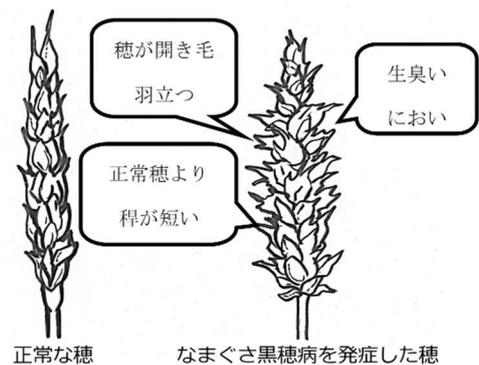


図1 なまぐさ黒穂病の特徴

<てんさい>

1てんさい根腐病の防除

「連作・短期輪作ほ場」及び「前回作付時に根腐病が多発したほ場」、「排水性の劣るほ場」では、必ず防除を実施してください。上記の条件で、曇天によりほ場の湿潤状態が続く場合は、2回目の根腐病防除を検討しましょう。

表4 根腐病の防除例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
ミリオネアフロアブル	4,000	7日	4回
リンバー顆粒水和剤	4,000	7日	3回
モンセレン顆粒水和剤	1,000倍	30日	4回 (育苗中含む)

※根腐病防除は散布水量 10a 当 200L の株元散布とします。

2アブラムシ類・ヨトウガの防除

アブラムシ類とヨトウガを同時に防除するため、下記薬剤で実施をお願いします。

表5 アブラムシ・ヨトウガの防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期 （収穫前）	使用回数 （以内）
リーズン顆粒水和剤	3,000	14日	2回

※リーズン顆粒水和剤はアクタラとマッチの混用剤です。マッチは殺卵効果がありますが、老齢虫には効果が低いので遅れずに防除してください。

3てんさいの中耕

- (1) 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」・「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。
- (2) 中耕作業の深さと広さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期（草丈 35cm くらい）までに実施しましょう。
- (3) 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

<ばれいしょ>

1疫病の防除

FLABS(ばれいしょ疫病初発予測)では、近隣市町村が危険期に到達しています。発生に注意してください（池田町：6/14に危険期到達、7/2が予測初発日）。

ばれいしょ疫病菌は10℃を超えると活動が始まり、最適気温18～20℃の多湿条件で多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地（排水不良箇所）、トラクタの車輪のぬかるんだところ（防除畦など）、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。

- (1) 初発前に必ず防除：ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
- (2) 初回の防除前に感染が疑われる場合：治療効果のある薬剤を使用。
- (3) 作物の生育に応じた薬剤選択：茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
- (4) 降雨に応じた薬剤選択：ほ場に入れられない状況が予想される場合は、Wインターバル（14日間隔）効果のある薬剤※の使用を検討してください。実施する場合は、初発前から散布してください。

※「リライアブルフロアブル 800 倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750 倍」、「ライメイフロアブル 2,000 倍」、「レーバスフロアブル 1,500 倍」、「ランマンフロアブル 1,000 倍」、「フロンサイドSC 1,500 倍」（平成 25 年度指導参考）。

表6 疫病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期 （収穫前）	使用回数 （以内）	効果の発現
グリーンダイセンM水和剤	400～600	7日	10回	予防
リライアブルフロアブル	800～1,000	7日	3回	予防・治療
ゾーベックエンカンティアSE	2,000	14日	3回	予防・治療
フロンサイドSC※	1,000～2,000	7日	4回	予防

※ 「フロンサイドSC」は1,000倍で菌核病、2,000倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

2軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降（7月上中旬）となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感染を防ぐため防除を行いましょう。初期防除を心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましよ

表7 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期 （収穫前）	使用回数 （以内）	効果の発現
スターナ水和剤	1,000	7日	5回	予防・治療
バクテサイド水和剤	750～1,000	7日	5回	予防・治療
マテリーナ水和剤	1,000	7日	3回	予防・治療
カスミンボルドー 銅シン水和剤	500～800	7日	3回	予防
マスタピース水和剤	1,000	前日	—	予防

※1 オキシリニック酸に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。また、オキシリニック酸を含む剤の使用は合計5回までとする。

※2 ストレプトマイシンを含む剤の使用は合計5回までとする。

3アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

本年はアブラムシの発生期が「やや早」、発生量は「やや多」と予想されています（北海道病害虫防除所「6月予報」）。林地や防風林近くの多発に注意し、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表8 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除薬剤例

農薬名	対象害虫			使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
	アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ	ナストビハムシ			
モスピランSL液剤	●(ワタ)	●	●	4,000	7日	3回
アドマイヤー顆粒水和剤	● (ジャガ/モモ/ワタ)	●		5,000~ 15,000	14日	2回
アクタラ顆粒水溶剤	●3,000倍 (ジャガ/ワタ)	○ 2,000倍	● 2,000倍	左記参照	14日	3回
ベジホン乳剤	● (ジャガ1,000/ ワタ2,000倍)		● 1,000倍	左記参照	30日	2回
ペイオフME液剤	● (ジャガ2,000/ ワタ1,000倍)	●	○	2,000	7日	4回
ゲットアウトWDG	● (ジャガ/モモ)		●	2,000~ 3,000	7日	4回
マブリックEW	●(ジャガ)			4,000	7日	2回
モベントフロアブル	●(ワタ)			4,000	7日	3回
ウララDF	● (ジャガ/モモ/ワタ)			4,000	7日	2回
コルト顆粒水和剤	● (ジャガ4,000・6,000/ モモ・ワタ4,000)			4,000~ 6,000	前日	3回

※ジャガ：ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ：モモアカアブラムシ、ワタ：ワタアブラムシ

※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの(以下、同じ)

※モベントフロアブルは銅ストマイ水和剤とは混用しない(ストレーナに付着物が生じる)。また、ストレプトマイシン含有殺菌剤との混用の場合は、モベントフロアブルを先に希釈する。

<豆類>

1中耕

初期生育を確保するために、除草剤の残効を考慮しながら、暖かい日に中耕を実施し地温の上昇を図りましょう。また、遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始10日前まで(7月上中旬頃)には最終の培土を終えましょう。

2大豆「わい化病」・金時「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

病虫害発生予察情報によると、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は「やや早」・発生量は「やや多」と、飛来時期は早い予測となっております。

3小豆「褐斑細菌病」の防除

6月中旬から初生葉に病斑がみられ、その後7月中旬頃が冷涼多湿な場合に急激にまん延します。また、発生時の中耕除草作業で発生範囲がさらに広がります。

初発が確認された場合は、速やかに抜き取るとともにカスミンボルドーによる防除を実施し、その1週間後に2回目の防除を実施してください。

4小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表9 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
ランマンフロアブル	1,000	7日	3回
レーバスフロアブル	2,000	7日	3回
リドミルゴールドMZ	500	30日	3回

5小豆アブラムシ類の防除

マメアブラムシは局所的に多発生するので、ほ場をよく観察し寄生が目立ったら早急に防除してください。

表10 小豆アブラムシ類の防除薬剤例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
モスピランSL液剤	2,000~4,000	14日	3回
ゲットアウトWDG	3,000	7日	3回
ウララDF	4,000	7日	2回

6菜豆(金時)「かさ枯病」の防除

かさ枯病にり病すると本葉に赤褐色の斑点が生じ、周辺部が黄色くなり葉脈はすじ状に赤褐色を呈し激しい場合は株が黄変し枯死します。

本病は低温多湿で発生しやすく、機械管理作業の接触でまん延します。子葉展開期から2回防除を実施しましょう。

7菜豆の「根腐病」発生時の対策

発芽後数週間で感染が起こり、6月中～下旬に降雨と高温が続くことで発病が激しくなります。発病株を発見したら、健全部の新根の発生を促すため、早期に培土しましょう。

野菜

今後、気温の上昇が予想されます。引き続き病害虫の発生に注意してください。

<たまねぎ>

早生品種で出葉数6葉、中晩生品種で出葉数7～8葉以降の除草剤散布は、ムケ玉の発生原因になるため、除草剤の散布は避けましょう。

1 ネギアザミウマの防除

ネギアザミウマの発生量が徐々に増えてきています。作況ほ場では50株中、7株（寄生株率14%）寄生していました。ほ場を確認し、防除を実施してください。

2 白斑葉枯病の防除

平年の初発は6月中旬頃です。初発を確認次第できるだけ早く（初発の5日以内）防除しましょう。初発後のフロンサイドSC 1000倍での防除が効果的です。その後は定期的な予防防除に努めてください。白斑葉枯病は2日以上連続した降雨、または10mm以上のまとまった降雨後7日間、特に平均気温18℃以上の温暖な日に初発の可能性が高くなります

3 細菌性病害(軟腐病・りん片腐敗病)

日照不足により軟弱徒長の生育となっているほ場では、りん片腐敗病および軟腐病の発生が心配されます。激しい降雨や追肥、手取り除草などの茎葉の損傷からの発生する場合があります。発生前からの予防防除を心がけてください。

◇細菌性病害の発生環境

軟腐病：25℃以上の高温多湿条件下で発生しやすい。特に多肥栽培では過繁茂になり、発生が助長される。

りん片腐敗病：18℃前後の比較的低温で降雨が続くと発生が増加する。

<にんにく>

1 摘蕾と収穫

玉の肥大を促すために摘蕾を行ってください。摘蕾の目安は止葉と花蕾（トウ）の高さが同じくらいになった時です。また、収穫は晴天日に実施してください。

2 病害虫防除

防除を行う場合は、収穫前日数を考慮してください。